梅里先生行狀記

新版天下茶屋

柳生石舟斎

吉川英治全集

第29巻

編纂委員

川口松太郎
川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・29　梅里先生行状記
新版天下茶屋　柳生石舟斎

著　者　吉川英治
装幀者　杉本健吉
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京九四二局一一一一（大代表）
振替東京三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
本文用紙　日本パルプ工業株式会社特漉
第一刷発行　昭和四十四年五月二十日
定価　六百八十円

© 一九六九年　吉川文子

目次

梅里先生行状記　一
新版天下茶屋　一九
柳生石舟斎　三九

梅里先生行狀記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

恋すちょう……

一

二月の風は水洟をそそる。この地方はまだ春も浅い。ひろい畑は吹きさらしている。

昼まになっても、日かげの霜ばしらは、棘々とたった儘だし、遠山のひだには、まだある雪が薙刀のように光っていた。

『麦踏め、麦踏め。――芽をふめ、芽をふめ、芽をふめ』

畑のなかで独り言が聞える、寒さと風に対抗しながら、それはだんだん大声となった。麦畑で、麦を踏んでいる老人の唇からである。

むこうの方でも、ふたり程、鍬をもって麦の畝をすいていた。

『老公か。……あのお声は』

ひとりがひとりへふり向くと、鍬の手をやすめ合って、

『はははは。そうらしいな。寒さを克服なさるため、足拍子にあわせて、書物のうちのお好きな辞句でも、吟誦していらっしゃるのであろう』

『いや。……』と、ひとりは耳たぶへ手をあてがいながら、

『麦ふめ麦ふめ。芽をふめ芽をふめ。と聞えるが』

するとすぐそれは聞えなくなって、彼方にいる老百姓が、麦踏みをやめてしまい、こっちを見ているふうである。胸にまでかかりそうな白い髯が、風のなかに著しく光って見える。

『おううい』

やがて聞えてくる声に、ふたりはあわてて鍬の柄を持ちかえ、

『あ。呼んでいらっしゃる』

何はさておきと、駈けだして行った。

『お召でしたか』

ひざまずいた膝のつきよう、横においた鍬のおきよう、ただの農夫ではあり得ない。

主従ともに野良着はつけているが、老百姓のほうなど、なおさらそれに見えなかった。寒かぜに赤くひき緊っている顔は、どこか大人の相をそなえ、大きくて高い鼻ばしらから顎にかけての白髯も、宇の眉も、為によけい美しくさえあった。

『林助、悦之進』

『はいっ』

『あさっては、月並の汁講の日になるの』

『左様でございます』

『今月はわしが宅をする当番であったな。みな集って参ろうな』

『みな楽しみにしております』

『皿、杯などの数が足るまい』

『どういう御趣向にあそばしますか、お小納戸の剣持与平なども、お支度に気をもんでおりましたが』

『趣向など無用。へだてなく語りおうて、ただ一夜をたのしむのが汁講の交りじゃ。汁には到来の猪があり、菜根にはわしが手づくりの大根、ごぼうもある。……だが、菓子は城下の浙江饅頭を用いたいな。舜水先生のお好きなものであった。先生の故国、明の浙江のそれと風味が似ておるとか。先生逝いてもう十年、お偲びする話題ともなろう』

『ではさっそくお城下の葛屋から取りよせておかせましょう』

『いやいや、自身で求めに出向こう。ここ久しく、城下にも出ぬ。ほかに用事もあるし、そちたちも供するがよい』

老公はもう歩き出している。畑は西山荘の前なので、百歩にして、そこの門までもどれる。

門といってもかたちばかりのもので、住居の屋根は茅ぶき、柱の多くは皮つきの杉丸太、竹の縁、粗土の壁、庄屋の家ほどもなかった。

『これよ、誰ぞおらぬか』

土間へはいって、中樞子の下の水瓶から水を汲み出し、手足の泥を洗いなどしながら、老公はふり向いていた。

西山荘の主といえば、いうまでもなく、水戸家の御隠居、さきの権中納言光圀とは、この人のはずである。

二

誰ぞおらぬか――と呼ぶ老公の声をきくと、うす暗い厨の土間の片すみから、むくと身をひるがえして、公のそばへ馳せて来たものがある。

『おまえではない。おまえではない』

公は、左右の手をさしのべて、二頭の鹿の頭をたたいた。

西山荘には、十頭たらずの鹿がいた。みなよく家人に馴れている。老公は鹿につきまとわれながら、御物置とよぶ小屋のなかに、鍬をしまい野良着をぬぎ外して、その隣りの三畳間にはいった。

丸窓の下に、一脚の机がある。

家臣は、ここを御学問所とよんでいた。かれの書斎であり独想の室であった。

小納戸役の剣持与平が、縁づたいに急いで来てその外にひざまずいた。

『いつのまに、畑からおもどりでしたか。少しもぞんじませんでした。……ちょうど御城下より御家中の牧野惣左衛門どのが見えられて、つい話しこんでおりました為に』

『惣左が来ていたか』

『なにかお願いの儀がありますようで』

『古いあのことであろう。毎度申しおる故』

『そうらしゅうございます。――ずっと以前、老公より惣左へ、お口約束をされた由ですから』

『約束を。はて？』

『いまは会うこと成らぬが、儂が隠居でもした後には、ゆるゆる会ってつかわそう――と、かように惣左衛門どのへ仰っしゃったことがおありだそうで』

『おお、なるほど、出府のみぎり、途上の旅舎で、思い出ばなしから、ふとそんなことを申した覚えがある。――それはもはや十年も前なのに、よう忘れずにおるものじゃ』

『惣左どのは忘れても、その日を待って待って待ちぬいておられるお方のほうでは、死ぬる迄、忘れる気づかいはない――と、惣左どのも、肩の重荷にしておられます』

『は、は、は、は。あれもさだめし、生涯の迷惑じゃったろう

に。よいよい、こんどは約束を果してつかわそうから、そう伝えて帰せ』

『お目通りをねがいたい容子で最前からひかえておりますが』

『わしもこれから城下まで出かけるところじゃ。供をして来いと云え。途々話そう』

『え、御城下へ』

その時、土間すそに、小姓の江橋林助と近習の渡辺悦之進の二臣が、野良着を平常のものに着更えて、迎えに立っていた。

『わらじを』

ふたりへいいつけながら、老公もすぐ立った。

ここから水戸の城下までは五里ほどある。老公の健脚にしても半日ではすこし無理。そう考えて、二臣は馬を曳きだしておいた。

老公は、それを見て、

『ひとつ、御苦労をたのむとするかな』

と、馬へ挨拶しながら乗った。

『お出まし、お出まし』

剣持与平は、広からぬ部屋部屋へ、外から知らせた。

梅の枝の影が映しているそこらの障子や杉戸があわただしく開いて、かれこれ十人以上もある山荘の召使が、みな藁草履をはいて、門のほとりに立ちならんだ。

お下婢もいる、小間使もいる、童子もいる、若侍もいる、老用人もいる。

老公は、百姓馬の背にまたがって、そこを通りながら、

『行って来るぞ』

と、右を見、左へ言った。

この西山から白坂へかけては梅の樹が多い。いちめん梅の名所だった。老公は梅がすきなので隠棲の地をここに選んだのであった。――その梅の林を出て梅のなかへ老公のすがたは小さくなってゆく。

『おう、もうあんな方へ』

後からあわてて追いかけて行くのは、本藩の家臣で、今朝から目通りの機を待っていた牧野惣左衛門だった。

三

江橋林助は二十歳がらみ、渡辺悦之進は二十七、八。どちらも若い。

そして老公の側には子飼から召使われているものなので、読書の侍坐、畑の百姓仕事、また外出の折も、かならずと云ってよい程、ふたりが供をした。

『林助、風邪をひいたの』

老公が馬の背からいうと、林助はくさめを放った鼻口へ、あわてて懐紙を当てがいながら、

『はい、どうもすこし。……尾籠をお目にかけました』

『若いくせに、畑へ出てすぐ風邪をひくようでは、いかんのう』

『そんな些細でひいた風邪ではございません』

『ホ、憤然と、大言したな。なんでひいたか』

『寒のうちから、悦之進どのと根競べを約束して、毎あさ暁起して、てまえは素槍千振、悦之進どのは、居合を三百回抜くという行をやっておりまする』

『ははあ、毎朝暗いうちから、山荘の裏のほうで、犢牛がうなるような声がしていると思うたら、おまえたちか』

『お眠りの邪げになりましたか。恐れいります。あしたからはもっと遠方でいたしまする』

『たわけを申せ。あの頃は、わしはもう風呂所で五体を拭いて読書しておる』

『その風呂所で、実は風邪をひいたのでございます。千回も素槍をしごくと、満身、りんりと汗にまみれて来ますので、毎朝、われわれの下風呂のほうで、水をかぶって、それから着衣いたします。――ところが今朝、例のごとく、ざんざと水をかぶって上って来ましたところ、大事なものが、紛失いたして見えません』

『大小か』

『いいえ、武士のたましいには違いございませんが、それをつつむものです』

『つつむもの？』

『はい』

『なんじゃ』

『申しあげかねます。……ちと尾籠ですから』

『ははは。和語で申そうとするから云えんのじゃろ。漢音で答えれば何気なく聞えるに。わしが代って云ってやろうか』

『お察しがつきましたか』

『犢鼻褌じゃろ』

『そうです』

と、林助は頭をかかえて、

『――そこで、はたと当惑いたし、はて、何者がかくしたかと、探し求めていますと、お手飼の鹿めが、それがしのその物をくわえて、遊んでおりました』

『さりとは、粋狂な鹿よの』

『おのれと、裸のまま、追いかけました。ところが容易に捕まりません。迅足の者を、鹿のようなとはよく云ったもので、さんざんにもてあそばれ、あげくに風邪までひいてしまいました』

『秀逸秀逸。近ごろ大出来な鹿ではある。悦之進、鹿のみやげに、いつもの糠煎餅、忘れるな』

『承知いたしました。が、ただいま林助の申しあげた話だけでは、まだ沈着なところがありますが、てまえの実見では、その時、裸のままで鹿を追いかけ廻して持て余していた彼の図は、実におかしいやら、気のどくやらで、何ともいえませんでした。老公へも御覧にいれたいくらいなもので』

『そうであろうそうであろう』

老公はひどく歓んで、右手で膝をたたいた。

徒歩と馬上と、かたちは主従の他行であるが、途々のはなしは、こんなふうに、何の気ごころも措けなかった。――また老公も、こういう仲に生じる心と心の春風を愛するもののようであった。

『そうそう。わたくしの事を左様にお笑いあそばすが、老公にも、時折、御狂気じみた独り言をよく仰っしゃる癖がありますの。ひとつ二つ、おたずねしてもよろしゅうございましょうか』

林助はくやしがって、馬上の人の白髯へ、戯れかかるように云った。

四

『なんじゃ、問うてみい』

『ほかでもありませんが、ただ今も、西山荘をお出ましの折、老公には、召される馬にむかって――ひとつ御苦労を頼もうかなどと、挨拶をして、鞍へお手をかけられました』

『ウム。そのことか』

『ひとの背なかへ乗るなら知らぬこと、馬へ御挨拶をなさるには及ぶまいと、存じられますが』
『そうかな』
『違いましょうか。わたくしの抱く不審は』
『ちがうと思う』
馬は黙々と老公をのせて弛い坂をのぼり坂を降ってゆく。主従の問答を馬耳東風とよそに歩いているふうだった。
里近くなると、田や畑に働いている人影は、遠く老公のすがたを見る者も、近く行き交う老若も、みなあわてて土下座した。——老公はいちいち馬の背から、
『よいお日和』
と、土民同士でする会釈を、同じように気軽に撒いて通った。
『どう違いましょうか』
林助が追求すると、老公は微笑をおさえて、すこし真面目になった。
『わからんか。なんのために日ごろわしと共に百姓しておるか。——わしははや官職を退いて、公には何の益もなさぬ閑人にすぎぬ。その閑人が、わずか五里の城下へまいるに、馬の労を費やしては、勿体ないではないか。馬も日に何升かの馬糧は食うが、これを田に使えば、人以上に耕し、これに担わせれば、汗して荷駄の役をつとめる。……その貴重なるものへ、山荘の一閑人が、鞍をかけて、悠々、労さず道をあるくとはまことに、申しわけないことだ。……馬もし霊智あれば、田畑に働く領民を見よと云って、わしのごとき無用人は、背からふり落してしまうであろうに』
『恐れ入りました。そういう思召でございましたか』
『振落されるのは嫌じゃから、あらかじめ、馬の御きげんを取って乗る。しかし、傍人に怪訝られるほど、それが目立つとすればわしにも到らぬ点がある。以後は気をつけよう』
『ついでに、もう一つ、伺いますが。……きょう畑で麦踏をなされながら大声で……麦踏め麦踏め芽を踏め芽を踏めと仰っしゃっていたようですが、あれはいかなる御意でしょうか』
『それもすこしそちの勘ちがいであろう。そう申した覚えはない。……ただ漸く雪をしのいで青々と伸びかけた麦の芽を、むざと踏む業の傷ましく思われたので、この芽を踏むのも、やがて根に力を蓄えさすためであり、麦の結実を豊かにするためであるぞと、心に弁えを正してやっていた故、つい、芽は踏め芽は踏め、根は張れ根は張れと、声になって口から出てしまったものじゃろう』
『——芽は踏め。根は張れ。そう仰っしゃって居られたのでございましたか』
『麦の芽は、領民の芽、わしが在職中は、また退隠の後も、この領土は、領主に芽ばかり踏まれている。——不愍と思う。……その心も手伝うていたな』
林助も悦之進も、咄嗟に、面を厳粛にあらためた。馬上の老公の眼は、土と人に対する愛にみちあふれていた。
『百姓も町人も工人もそちたち侍どもも、さだめしこの世をおもしろおかしく、華奢に遊楽に暮したかろう。——世はいま元禄五年、江戸も京も、他領の国々も、なべてそういう風潮の世であるものを。……ひとりわが水戸だけがそうでない。厳として、芽を踏まれておる。それも久しい』
憮然として老公はつぶやいた。
『根に力を蓄え、望みは、永遠の結実に持て。——そう禱るわしの施政が踏みしめて来た領土。ここの領民は可憐しいものた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちよ』

その時、後から追いかけて来た牧野惣左衛門が、ようやく追いついて、

『御城下口まで、てまえもお供させていただきます』

と、馬上へ礼儀をしてから、馬のあとに従った。

老公はすぐ振向いて、

『惣左、惣左。鞍わきへ参れ。――わしからの返辞は、聞いたか』

『ありがたい思し召。剣持与平どのからうけたまわりました。御意のほど、伝えてあげたら、あの御方も、どんなにお歓びかとそんじます』

『彼女は……もう幾歳になったかのう』

『五十六、七かと思いますが』

『よい婆だの。子は大勢か』

『御子には御運がなく、二十歳ばかりのお娘御と、まだ前髪の少年と、おふたりしかございません』

『彼女が、わしの側へ仕えておったのは、わしが二十四、五の頃じゃった。もう四十年近いむかしとなる。……さすがの美人もさだめし変ったことであろう』

『ところで。――漸くこんどはおゆるしを賜わりましたが、いつごろ雪乃さまとお会いくださいましょうか』

『――左様』

と、すこし案じて、

『早いがよかろうな』

『もとよりお早いに越したことはございません。何せい、雪乃さまのほうでは、二十年やら三十年やら、実に長いあいだを、凝と、おゆるしのあるまでお待ちになっていた事でございますから』

『あさってはどうじゃ、早すぎるか』

『結構でございましょう』

『黄昏れから伴れ参るがよい。ちょうどその夜は、例の汁講で、西山の隠宅に、講中の侍どもが打集うことになっておる』

『それはお賑やかなことで、よい機に相違ございませんが、お年は老っても女は女、それに……それにまた……お目通りする事がらが事がらでもございます故、いかがなものかと存じますが』

『何の何の、世間へ憚ることも、羞恥むことも少しもない。光圀もことし六十五、雪乃も六十路にちかい年。よも、今さら仇し浮名は立つまい』

『では、お旨のまま、雪乃さまへ申しあげておきまする』

馬の前に立って、肩をならべて歩いていた江橋林助と渡辺悦之進は、顔を見あわせてほほえんだ。

いま、うしろ耳に、聞くともなく聞いたはなしから、ふたりは同じことを思い出していた。

――もう古いことだが、今もって家中の者が、時折うわさにする、それは老公の隠れもない艶聞のひとつであった。

敢て、そのひとつと、断らねばならぬほど、老公の青年時代には、幾つもの艶聞がある。

雪乃という奥仕え女中とも、部屋住みの頃、想思をかよわせていたが、この頃から彼の心境に、著しい変化が来ていた。

（恋のために恋死なん）

と、いうような情熱が、二十歳をこえた一頃の彼には、放縦、狂躁、浮薄なかたちをもって、不良質をひどく素行にあらわしていたものだったが、それが雪乃と恋をするようになってから、

（恋は路傍の花。――恋を摘むは男の道草）

と、いう風な軽い考え方に変って来たのであった。

うち気な、純情な、いやしくも貞操を戯れの火には投げない彼女のきれいな感化にもよるが、その前後、老公の厳父頼房が、厳戒を加えたこともあり、お傅役の小野角右衛門が、

『もし、御改悛がなければ、わたくしは腹を切って、御先祖さまにお詫つかまつります』

と、必死に忠諫したことなどもいたく青年の光圀を、考えさせたらしかった。

で、ふたりの恋は、きれいに終ったのである。光圀の姉、糸姫のはからいなどで、雪乃はその後、きれいな身となって、家中の白石助左衛門へ嫁したのであった。

若い鶯

一

朝まだき、水戸の上市下市は、もう喧騒な庶民風景につつまれていた。馬のいななきも、人のどなり声も、薪のけむりも、あらゆる物のにおいも、旺盛な庶民の欲望と汗から離れているものはない。

『皆はやいな。よく稼ぐ……』

老公は、往還の旅人に交って、城下へはいっていた。

そして、町屋の殷賑なさまや軒毎の営みを見て、心からうれしそうにつぶやいた。

ゆうべは府外の昌久寺に一泊して、牧野惣左衛門はそこで別れ、今朝早く、二人の供をつれて出て来たものであった。

下町まで一緒に来た寺僧が、

『山門のお客様です』

と云ったので、木戸の役人も、老公とは気もつかない容子であった。

老公もまた供の衆に、こうかたく口止めしていた。

『隠居の身が、のこのこと、城下へ参って、要らざる眼をひからしておるなどと聞えては、藩主を初め、諸役人の気づまりに違いない。知れぬ限りは微行して、臨機に、さり気なく通りぬけようぞ』

西山へ退隠後、城下へ来たのは、わずかこれが二度目ぐらいなものであった。その一度は、公然お城へはいって、現在の藩主である自分の世子綱条に会って、ねんごろに向後の施政――内治外策について諭すところがあったという。

『わしはすでに世外の無用人。国力の興るも亡ぶも、一におん身の統べひとつにあるぞ』

世子綱条の襲封と同時に、こう云い渡してあるので、かれは一切の政務から身を外に措いていた。

いまの藩情は、決して無事安泰なものではない。内にも外にも、多くの難事が横たわっている。けれどそうして全責任を綱条へ負わせたほうが、はやく彼を威信づけるものだし、またそれが王道の正しいすがたであるとも老公は信じていたにちがい

ない。

『悦之進』

老公は供の者をふり向いた。

乗馬は、昌久寺にあずけて来たので、きょうは気がるな徒歩である。西山の梅を伐って、杖としたのを突いている。けれど、杖を頼るようなお腰ではない。むしろ、途上に不測の事でもあれば、その杖は不逞の者の頭上へ、忽ち一颯、唸りそうな含みを持っていた。

『はいっ。――なんぞ？』

十歩ほど離れていたので、悦之進と林助は、老公のそばへ、大股に寄って行った。

老公は、左右の町屋を見まわしながら、

『わしが在城中と、綱条の代になってからと、城下の繁昌は、どう見えるな、さびれたか、盛になって来たか……？』

『おそれながら、較べものになりません、何といっても領民は、大柱とたのむお方の御退隠に、気力を落しておるように見られます』

『では、さびれた方か』

『陰気になりました。以前と変りなく町々はうごいて見えますが、庶民のすがたに何か元気がないようで』

『なぜじゃろう』

『むずかしい儀で、われわれ若輩などには、お答えする知識をもちませぬ』

『ウム、む』

無理もないというように老公はうなずいた。

すると本町の辻で、はたと、目のさめるような美しい娘に出会った。白粉気はないが、凛として、しかも嫋かで、文筥を胸に抱いている姿のどこかに初々しさもあって、気品のある武家娘だった。

『……？』

老公ですら、ちょっと目をみはったほどである。なぜなら、ゆくりなくも彼は、二十四、五歳の頃の恋人の貌かたちを、そのままその娘に見て、

――似ている。

と、ふと思い出したからであった。

娘は、若い鷺のように、辻を斜に、老公のほうへ小走りに寄って来ようとしたが、なぜか、うしろにいた渡辺悦之進が、あわてて顔を横に振ったので、はたと足を立ちすくめてしまった。

二

何かもの云いたげな瞳を、悦之進のすがたへ注いだが、悦之進のあわてた顔いろに、彼女も顔をあからめて、道を曲ってしまった。

老公は、見送ってから、

『悦之進。いまの娘は、たれの娘か。――なぜそちは、素直にあいさつをしてやらなかったのじゃ』

と、却って、彼の無情をとがめた。

悦之進は、まっ赤になった。恐縮をとおりこした容である。

『申しわけございません』

『それは娘に云うてやれ。わしに詫びることはない』

『路傍ではあり、お供の折、遠慮いたしておりましたが……父と父とが、極く親しくしていたので、それで』

『いずれ、家中の者の娘であろうが、その父親というのは』

『もう世におりませんが、白石助左衛門どのの御息女です』
『なに、助左衛門の』
これには老公も驚いたらしい。余りにも、自分のうちに感じていた事と中りすぎていたからである。
似ていたはず。――いま去った娘のどこかに、自分の若かりし頃の恋人にそっくりな面影が見えたのは、偶然ではない。
白石助左衛門といえば、いまは亡き人であるが、雪乃の良人だった者である。
『では。……雪乃の娘か』
『さようで御座います』
『そちも独身。許嫁のあいだとでもいう仲か』
『いえいえ。そんな次第ではございません』
『それに似たような程度か』
『……どうも寔に』
悦之進は途方にくれるほど、ただ羞恥んでしまっている。もう三十近いが、その容子は童貞の潔白を証明している。
槍術は天性の上手。剣は真陰流をきわめ、幼年から朱舜水に師事し、また心越禅師に侍座して、侍ひとかどのたしなみは修めた者とは――老公の眼からも、今は見えないほどな彼の困り方である。
『ははは、悦之進、ひどく閉口いたしたな。こんな折には、禅もだめじゃろ。そちの日頃よくいう禅の肚でも――』
『だめですな』
とうとう兜をぬいだ形である。悦之進は、腋の下に汗をおぼえながら、頭を掻いて、一矢酬いた。
『御老公にはかないません。御自身のお若いころに、人すぐれて御修行がありましたから』
『云いおるぞよ』
と老公は反らして、林助へ笑いかけながら、
『そちなどはまだわけて未熟、悦之進の学問武芸には見習うても、わき道には見習うな』
と、云った。そして、
『こう町中を連れ立って歩いては、微行も微行になるまい。中食は又左の浪宅にてしたためる。わしは葛屋へ立寄って、饅頭を誂えて後より気まかせに参る故、そちたちは、人見又左の宅で待ちあわしておれ』
と、次の辻をひとり曲って行った。
気がかりにはなるが、老公の意志である。ふたりは老公のすがたが、旧い菓子舗の軒へはいるのを遠くから見届けてから、人見又左衛門の浪宅へ先に行って待つことにした。
老公は、老舗の店がまえをながめまわし、そこの黒い看板に、浙江まんじゅう
とあるのを見出すと、杖を店の土間へ入れて、おおどかに呼びたてていた。
『まんじゅう屋。まんじゅう屋。――誰もおらんのか。商はしておらんのか』

三

返辞がない。
そこで老公は、少々、足のつかれを思い出して、折もよしと、店框の端に腰かけていた。
するとひとりのお孤がのっそりと入って来た。裏へでもまわって物を云うのかと見ていると、そうではなく、
『菓子をくれい。おい、店番はいないのか。店番は』

と、さきに呼んだ老公と同じように、奥仕切の中のれんへ向ってどなりだした。

老公の声よりもずんと大きいので、届いたとみえ、奥のほうで返辞がした。倉皇と出て来たのは、老舗の主らしく、

『いらっしゃいませ。どうも失礼をいたしました。店の者をつい近所まで使に出しましたので。……何をさしあげますか』

大きな塗のかさね箱の蔭で、手をふき、たすきを外して、それへ坐って出たが、ふと仰ぐと、むさぐるしいお菰が傲然と立ちはだかっているので、

『おまえさんかえ。いま呶鳴んなすったのは』

『おれだよ』

お菰は、おれだが、それがどうしたんだ――といわぬばかり、しばらく無遠慮に主の顔を見下ろしてから、

『菓子をくんな。上菓子を。もらいに来たんじゃねえ、買いに来たんだ。この通り金はある』

と、片方のたもとへ、手を落して、銭の音をさせた。

主は坐り直して、

『売らないよ』

膠なく云った。

『なんだと』

『売らないってことさ』

『ここは商家じゃないのか。客にむかって、そのあいさつは何だ。菓子舗とかんばんをあげておいて、菓子を売らねえという法があるか』

『ある』

『おれをお菰と見くびっていやがるな。金がねえんじゃねえぞ。客に分けへだてをつけるのか、てめえは』

『つける』

『もう承知はできねえ』

お菰は店のまん中へ、片あぐらに腰をすえこんで、かぶり物のきたない手拭をとった。眼も鼻も満足にそろっている顔をたしかに示そうという気らしい。

『見損なっちゃあいけねえぜ、おい。此店のまんじゅうみてえに、白ぶくれに膨れていやがって。那珂川原の勘太郎を知らねえのか、てめえは』

『知っていますよ、だから猶さらおまえに菓子は売れない。しかもわしの家で製る上菓子などは、おまえの口にするものじゃない』

『な、な、なんだと。……白まんじゅうめ、もう一ぺん云ってみな』

『金はあるぞ、上菓子をくれ。――それが乞食のおまえさんの云えることばか。菓子などというものは、三食のほかのものだ。三度の御飯をたべる人なみ以上にも働いているおひとに一番たべていただきたいと思っている。菓子舗でも働きがいは欲しいからね』

『なま意気をいうな。商人なら金にさえなれば文句はあるまい。おれも意地だ、何倍にでも買ってやるからこの店で一番の上菓子をつつめ』

『千人の商人のうちには、ひとりぐらいはそんなのもあるだろうが、人間の本性は、そんな呆っ気ないものじゃない。おまえにもその性根はあるだろう。人なみに上菓子が喰べたければ、人なみに働くがいい。人の作った米をむだにたべて、そのお百姓でも口にしない上菓子を喰おうなんて、虫がよ過ぎる、世のなかを小馬鹿にしすぎる。――見りゃあまだおまえさんも三十

そこそこの若さじゃないか。その満足な手足を親からもらって、親御にもすまないと思わないのか。出直しておいで、出直して』

四

すごい眼の玉をむいて、いまにも吠えつきそうな顔をしていた那珂川原の勘とかいうお菰は、ふと、その眼をふせ、首をたれ、片あぐらを乗せていた店框から身を退くと、

『……お喧ましゅう』

と、起って、間が悪そうに、

『また、いつかきっと、出直して買いに来る』

どう考えたものか、すごすご去りかけた。

菓子舗の主は、

『お待ち』

と、あわてて呼びとめた。

急に、虎が猫になったように、おとなしく帰り出したお菰の容子に、かえって気味も悪くなったろうし、云い過ぎたとも悔いたのであろう。

竹の皮に、あわてて菓子をつつみ、それをお菰の手に恵んで云った。

『悪くとってくれちゃあいけないよ。何もおまえを辱かしめるつもりで云ったのじゃないからな。さ、理がわかれば、わしもそれで満足だ。……多寡が菓子のこと、持っておいで、なあにお代なんぞいらないよ』

『ありがとう』

お菰は、竹の皮を、押いただいたが、そのまま上り框へおいて、

『おあずけしておきましょう。何年か先まで――』

ぷいと、風みたいに、立ち去ってしまった。

気の毒そうな顔して、主は、ぼんやりあとの往来をながめていたが、まだもうひとり片端に腰かけていた客がいたことに初めて気づいて、

『いや、どうも、とんだところを。お待たせいたしまして』

云いながらもう主はひどくびっくりしていた。あわてて土間へとびおりている。そしてあとのことばも知らないように、

『……これは、どなた様かとぞんじましたら、西山荘の老公さまでいらっしゃいましたか』

『あるじ』

『はい、はい』

『さように人をみて、客にわけへだてしてはなるまい。いまのお菰がもういちど怒りにくるぞ』

『おそれいりまする』

『だが、そちの云ったことはおもしろい。さむらいに武士道、百姓に百姓道、商人にも町人道はあるな。そちの製るまんじゅうはうまいと、朱舜水先生がいわれたのも、そこにおまえの風味もあるからじゃろう』

『何せい、ここはあまり端ぢかでございますから、どうぞ、どうぞ』

『いやいや、すぐもどる。おまえこそ上にいなさい。ここは店、ほかの客も見えように。わしの用向も、そのまんじゅうだが、いまでも舜水先生がおこのみのように製っておるのか』

『御註文がございますれば』

『あすの夕刻までに、西山荘へ何ほどか届けてくれい。宵をこえては味が変ろう』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com